

幾たびも

山田真砂年

水平といふしづけさや代田べり

青田風一人で歩く畦広し

魚にも目覚めのありて青時雨

麦熟れて畠もやもやしてゐたる

皐月富士ひつきりなしに新幹線

喉元にこゑあり柿若葉眩し

若葉して空のせせらぎ聴きゐたり

躊躇明るし昭和が歪む硝子窓

二三日待てば極楽蓮の池

蓮ひらく濁世と言うたではないか

夏草や人を信じぬ山羊の貌

くちなはの流るる川やささ濁り

黄土ゆく旅にしあれば麦の飯

万緑や笑窪のやうに池閑か

幾たびも雲過ぎりけり柳蘭

とんばうの木陰より出て池の上

転ぶ子も寝転べる子も大緑蔭

腹を這ふ蟻王のごと爪弾く

雨雲は海より来たり海紅豆

井戸水に喉を潤し海水着